

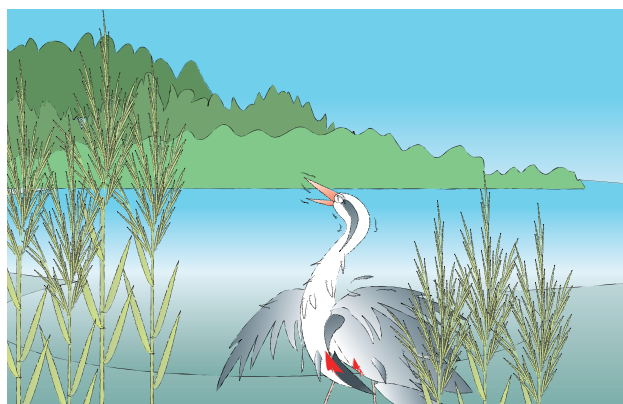
あおさぎのいど



むかしむかし、善通寺のよしわらの里は、山すそに田んぼが広がるさびしい村でした。村の中ほどには、「せいりゆうさん」とよばれているじん社がありました。その近くはぬまになっていて、一めんにあしというせの高い草が生えていました。

ある日のことです。山のむこうから、一羽の青いさががとんできました。さぎは、ぬまのあたりまで来ると、どうしたのか羽をくるしそうにうごかしながら、よろよると下りていきました。田んぼのしごとをしていた村人たちが、ふしぎに思っ行ってみると、あしのかげでさきほど見たさがが、くるしそうにもがいていました。さぎの羽はおれたようにまがり、おなかのあたりはまっ赤なちでそまっていました。

「これはひどいけがじゃ。」





「いたいだろうに。かわいいそうに。」

村人たちは、さぎを あしのはっぱをしいた上にねかせました。そして、きず口をきれいにあら
い、

「けがが 早く なおりますように。」
と、羽を やさしく なでてやりました。

つぎの日も、村人たちは さぎのようすを見に
来て、きず口をつめたい水でひやしたり、頭や羽
を やさしく なでたりしてやりました。えさを
もってきて さぎのそばにおいて、そっと帰る村
人もいました。三日たつと、さぎは、少し羽をう
ごかせるようになりしました。五日もたつと、え
さをたくさん食べて すっかり 元気になり、も
うあしのはっぱの 高さまで とび上がれるよう
になりました。

七日七夜たった ある日のことです。一羽のさぎが、
なごりおしそうに 村の上を ゆっくり ゆっくり
回って、やがて村のむこうへ とんで行きました。

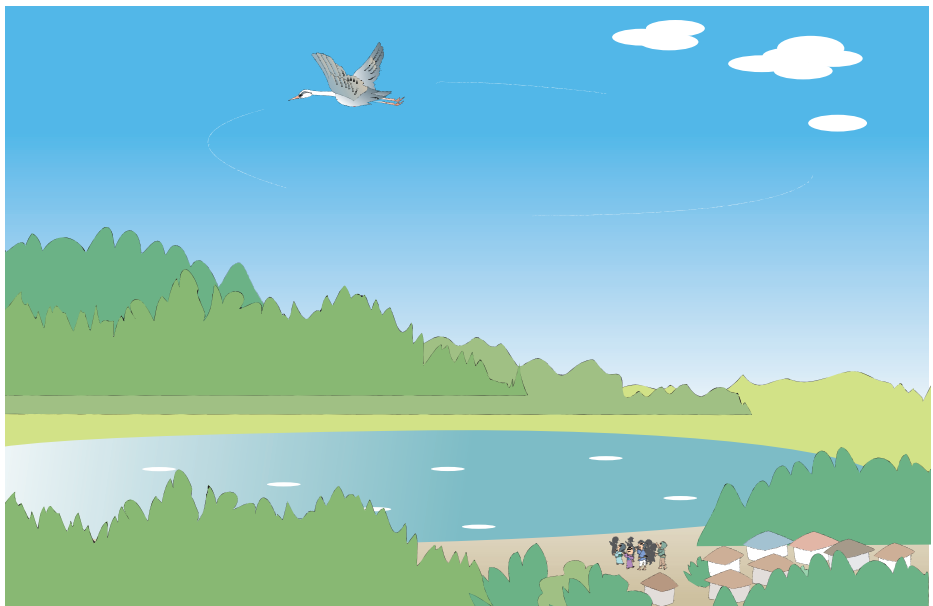
「ああ。あのさぎではないか。」

村人たちは、あしのぬまに かけつけました。や
はり あのさぎのすがたは、どこにも見えません。
そして、ふしぎなことに、そこには いつの間にか
いずみができており、水がこんこんと わき出ている
のです。

「ああ、なんてきれいな水だろう。」

「それに、こんなに たくさんの水が わき出るなん
て。」

よしわらでは、水が足りなくて たいへんこまって
いましたから、みんな大よろこびです。村人たちは、
いずみの水を みんなで 大切に大切に つかいまし
た。



ある日のことです。目のびよう気でこまっていた人が、このきれいな水で目をあらいました。するとふしぎなことに もとどおり すっかり よくなったのです。このうわさは となり村にも そのまたとなり村にも広がり、目のびよう気でこまっている人が、たくさんやって来ました。きれいな水で目をあらった人たちは、びよう気がなおり、よろこんで 帰って行きました。よしわらの人たちは、このいずみを「あおさぎのいど」とよんで、いつまでも 大切にしたいということです。

